

平成 19 年度 グループ・プロジェクト研究計画書

(フリガナ) 氏名	(ヤマザキ リュウジ) 山崎 竜二	研究科セクター等 講座名	知識科学研究科 創造性開発システム論講座
研究課題	<p style="text-align: center;">高齢者の残存能力・潜在能力を有効活用する 社会システムの構築</p>		
研究目的	<p>施設内介護の方法論と連動して、施設外の介護福祉の方法論構築を課題とする。高齢者施設と地域、高齢者と他世代の隔離状況を解消し、少子高齢社会対応型コミュニティのモデル構築を図るため、下記を目指す。</p> <p>1. 高齢者の認知・情動・意欲など精神機能に訴え、残存能力・潜在能力を引き出す</p> <p>2. 高齢者の力を有効活用して子どもへの教育との相乗効果をもたらす（伝承的・創造的活動のモデル構築）</p> <p>3. 子ども・保護者・近隣住民との接点から、認知症を抱える人の身近な理解を促す</p> <p>地域で認知症高齢者が担える社会的役割を回復し、偏見を払拭する：アンチ・エイジングの先入見を問う</p>		
研究方法	<p>フィールドは 市の介護予防教室（3教室：辰口・寺井・根上）、 宮竹小学校区（モデル地区）とする。予防教室では導入した回想法の効果評価や近隣保育園との交流プログラムの検討を行う。宮竹小学校では第一に校区の一般高齢者が参加し、児童が高齢者との共同作業から体験談を作品化する取組みを進める。第二にこれを主に施設在住の認知症高齢者が地域住民と交流し、社会参加する機会とする。第三に小学校の取組みが予防教室に通う特定高齢者にとって卒業後の受け入れ先となることを狙う。世代間交流に回想法を適用した世代間回想法を主なアプローチとする。市や社協、アーティスト、臨床哲学研究者などと連携を探り、プロジェクトの持続的発展と、児童を起点に地域住民へ認知症の人への理解を促す際の論点の深化を図る。</p>		
研究の特色・意義	<p>行政課題として喫緊の予防事業を活かし、一次から三次に渡る活動を一体化させたダイナミックな事業展開を図ることが第一の特色として挙げられる。小学校における創作過程で記録した地域や活動の写真・映像は施設内の回想法で用い、また作品化された創作劇も予防教室などで用いられる。単発的な取組みではなく、持続的かつ発展的な仕組みを築くことは一体的な予防事業から町づくりに至る地域活性の面でも有意義である。第二の特色は、受身になりがちな高齢者、とりわけ認知症高齢者が教育や育児支援で力を発揮する機会を設けること、特にカリキュラム導入で制度的に設けることである。第三には子どもの視線から施設内に閉塞的な認知症ケアの文化、コミュニティケアのあり方を変えること、第四には哲学の観点から、認知症高齢者を病人として捉える潮流に対して人の自然な老化の過程に位置づけ、認知症を語る際の論点深化を図ることが挙げられる。成長モデルと並行し、誕生と同時に始まる老いの過程を孕む生命モデルを探究する。</p>		

期待される成果	<p>少子高齢化という社会構造の変革に対応可能な社会システムを構築するため、校区単位の局所的なモデル、そして予防教室や高齢者施設を含め市内各地域に及ぶ広域モデルを築く。成果物として活動と調査の結果について行政報告や学会、研究会での報告を行い、最終的には平成20年3月に報告書をまとめる。市内・校区単位でモデル化したものを他地域でも応用可能にすることを目指し、介護福祉の方法論構築と実践理念・本質追究について論文の形で成果報告を行いたい。老人会など自治組織の活用や子どもを含むボランティア活動の促進により地域貢献として具体的な活動成果を上げる。一連の実践全体を通じて、従来の成長偏重の社会追求と並行し、未曾有の少子高齢化に臨む人間の老いや脆弱性を受容可能な成熟社会のモデルを探る。</p>
---------	---